

【ポスターセッション】

若者の恋愛関係と暴力に関する研究

—ネット上の掲示板に見る暴力問題と解決にむけた支援—

○ 国立大学法人群馬大学 長安 めぐみ (会員番号 008872)

デートDV防止プロジェクト・おかやま

親密なパートナーにおける暴力 (IPV) ・ピアサポート・ナラティブ

1. 研究目的

本研究では、若者の恋愛関係と暴力の問題に着目し、ネット上の「相談掲示板」を利用した問題解決の試みを検討する。現在、若者の恋愛関係における暴力は「10代から20代の若者の約半数が経験している」とされ、暴力関係に陥ってもその半数がだれにも相談せず、被害者の半数が暴力に苦しみながらも加害者からの離別もできない状況にある。専門的な支援や情報は届きにくく、唯一の相談相手は友だちであることが多い。

2. 研究の視点および方法

先行研究とアンケート資料に基づく考察、ネット上の相談掲示板の内容の分析を行う。本研究では、若者向けの恋愛相談ホームページ「恋する二人のまじめな相談」(筆者が所属する民間支援団体「デートDV防止プロジェクト・おかやま」が設置)を利用し、若者たちの書き込みの内容の分析を行う。掲示板の内容の分析については、2006年10月～2008年3月の532日間に掲示板に書き込まれた637件の相談のうち、「若者の恋愛関係における暴力」に関わる129件のスレッドの内容について分析する。まず、掲示板の書き込みを相談者の性別や所属、生活状態、暴力の実態、被害の状況に基づき分類を行う。内容分析にあたっては、福祉や医療の分野での対人援助に関わる領域に有効な質的研究方法である「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)」を用いて、「若者の恋愛関係における暴力の被害者の心理状況」の概念を抽出し、その対応状況を探る。

3. 倫理的配慮

本研究で分析を行った相談掲示板「恋する二人のまじめな相談」(運営期間 2006年10月～2012年3月)では、学術研究として利用する旨を利用上の注意において表示し同意を求めた。また、相談者の個人が特定されないように配慮した上データ分析を行った。

4. 研究結果

本来、配偶者間も恋人間の暴力も、親密で安全で安心できるはずの親密なパートナーにおける暴力 (IPV) という概念をもって検証することで、一連のつながりを持つものとして捉える事ができる。IPVは表面化せず水面下で進行し、長期化し重篤化する。加えて、若者におきる暴力は、支援が得にくいことや離別にあたって生活圏を変えにくいこと、思春期という不安定な時期があいまって、問題を複雑にする。暴力の日常化、軽視が被害の発見を遅らせる。若者の場合、「友だち」や「ピアサポート」が重要なカギとなる。

恋人間暴力でも、身体的な暴力や虐待がある場合、恐怖の植え付け、依存性の助長や自尊感情の崩壊がおこり、被害者は自覚しない間に完全に加害者に洗脳された状態になる。

「心理的監禁状態」によって相手の言いなりで逃げられない状態に陥り、「長期反復性外傷」を受ける。何よりも大切なことは、被害者を「心理的監禁状態」の中で生じた、「生き残りのための心理的防衛」反応から救い出し、傷ついた自尊心の回復を図ることである。若者の恋愛関係と暴力の状況は、最も書き込みが多かった15歳から20歳という若い世代において多く、被害の状況はかなり過酷である。被害者は、暴力を認めたくなかったり、なかなか相談できなかったりする中で、暴力は、軽い束縛から命にかかわるような激しい身体的暴行へと次第にエスカレートしていく。他の暴力と重複しながらであるが、その中でも精神的な暴力は掲示板の中で最も多く見られ、束縛による暴力との相関関係も伺われた。

本研究で、相談掲示板の書き込みから抽出された「被害者の暴力への認知の概念」は、「暴力の責任」「嫌われることへの不安」「うまくいっている」「見放せない」「やっぱり好き」「関係改善への期待」「やっぱり怖い」「誰にも言えない」「自分の気持ちがわからない」「疲れてしまう」の10概念であった。それぞれ必要な対処は異なっており、若者同志の活発で「ポジティブ」なやり取りは重要な役割を果たした。特に経験者の書き込みは説得力があった。経験者と出会うことで、解決のモデルを学びとる。この「解決への気づき」が重要である。被害者の暴力への認知や心理状態に応じたタイミングのいい助言や支援が求められる。掲示板で確認された「ピアサポート」による「ナラティブ」の効果は、若者への啓発の場面でも活用することができると考えられた。また、恋人間の暴力も、配偶者間と同様、離別時に一層困難や危険を伴うため、加害者からの支配が強まる前に、解決に向けての支援や情報提供（警察の対応・加害者対策・安全確保・相談窓口の案内等）が得られることも大切な鍵となる。そのためにも状況を把握する「聴く」という作業が重要である。相談者は自身の悩みを掲示板に書き込み、顔の見えない第三者にポジティブなやり取りを通して「主人公として語る」ことで、それまで、加害者との関係を続けるために、無視して後回しにしてしまいがちだった自身の気持ちに向き合う姿勢を取り戻す。掲示板は「セルフケア」の効果を生み出し、実際の解決むけて一步を踏み出す勇気をもたらした。

5. 考察

若者の恋愛関係における暴力問題の支援の在り方は、被害者が安心できる「見守られ感」を支援者が作り出すことであり、若者の「気軽に」「対等に」「好きな時に」「匿名で」のニーズに応えることである。掲示板を利用した本研究での大きな到達点は、問題解決に向かおうとする当事者の持つ力の強さと、それを支えようとする若者たちの豊かな関係性を発見できたことである。「やさしい対話」を繰り広げる環境を整えることで、ともに手を携え、厳しい状況を切り開く力を引き出すことが可能になる。そして、その場に年代の異なる大人、そして専門的な知識を持つ者が「邪魔をしないように」参加することで、新たな広がりも見せ、現実の支援への期待感を育む可能性も見えてきた。